

# 漢字学習のあり方に関する

## 学習者の問題意識調査（2）

清水 百合

### 要 旨

本稿の目的は、教師が行うテストでは測れない学習者の問題意識をアンケート調査で明らかにし、漢字学習のより効率的なあり方を考える一助とするところにある。今回は非漢字圏学習者が多い機関で調査し、分析の結果、日本語の「読み」や「書き」に対する印象は、楽観的とは言い難いが、それでも「漢字は自習できる」と自負している学習者が多いことが分かった。

[キーワード] 問題意識 学習者の自己評価 非漢字圏学習者  
漢字圏学習者

## Learners' Views on Problems in Kanji Learning (2)

Shimizu, Yuri

The purpose of this paper is to clarify the problems which the learners have in kanji learning through questionnaires to the learners. The results will help to aim at more effective ways of studying kanji. Through the analysis of the questionnaires it became clear that the learners do not have optimistic views on their potential in reading and writing Japanese. However, many of the learners have self-confidence in studying kanji by themselves.

## 1. はじめに

1993年「漢字学習のあり方に関する学習者の問題意識調査(1)」<sup>1)</sup>において、漢字圏学習者の多い教育機関で、学習者が漢字学習に関してどのような問題意識をもっているかのアンケート調査を行い、その結果を分析し、学習者の問題意識について考察した。今回は、前回とは対照的な非漢字圏学習者の多い教育機関において、同じ内容のアンケート調査を行い、その結果を分析し、前回の一部(筑波大学留学生センター)と比較した。

## 2. 調査の概要

### 2. 1 被調査者の内訳

今回の被調査者は、国際基督教大学日本語科の学習者56名である。これらの56名の学習者は、それぞれ異なった日本語既習歴をもって集まり、93年9月から国際基督教大学日本語科において日本語の学習を始め、一年後の94年9月現在もう帰国した者、さらに学習を続けている者と二つのグループに別れた。このアンケート調査は、彼等が国際基督教大学日本語科で学習を始めてから、3カ月から5カ月たったころに実施された。

被調査者は、次の3つの方法で分けられた。

表-1 国際基督教大学日本語科のクラス分け

初級			中級			上級	
J 1	J 2	J 3	J 4	J 5	J 6	A 1	A 2
			☆ 中 級前 期		☆ 中 級後 期		☆ 上 級後 期

まず国際基督教大学日本語科でのクラス分けは、J1からA2までの8つのレベルに分けられるが、そのうち今回のアンケートに回答してくれた学習者は、上の表-1に示したようにJ4の中級前期が19名、J6の中級後期が20名、A2の上級後期が17名の3つのレベルに位置している。

またアンケート調査の一部として行った漢字力テストの結果による分け方では、上位者(30点満点の21点以上)が3名、中位者(11点以上20点以下)が30名、下位者(10点以下)が23名となっている。

最後に非漢字圏学習者と漢字圏学習者の分け方では、非漢字圏学習者が45名、漢字圏学習者が11名である。この漢字圏学習者の内訳は、帰国子女であるとか、両親のどちらかが日本人であるといった漢字圏学習者と判断するに難しい学習者と韓国や香港からの比較的漢字圏学習者と判断しやすい

学習者が混在しているので、厳密な意味で漢字圏学習者とは言い難い。しかしこの教育機関に限っていえば、他の学習者に比べて少しでも漢字教育の基礎があるこのグループの学習者が、何か非漢字圏学習者とは異なった意識があるのかを探るために、暫定的に漢字圏学習者と呼んで分けてみた。

## 2. 2 調査内容

本調査は以下の2つの部分からなる。

### [1] 学習者の漢字力を測るテスト（四肢選択 30問 30点満点）

このテストは、筑波大学留学生センターのプレースメントテスト（文法、聴解、読解、語彙、文字の5つに分かれている）のうちの一つ、「文字」をそのまま使った。これは実際プレースメントテストとして使われているその実績から、学習者のレベル分けに妥当だと判断したからである。問題としては、類義の区別、同音異義、濁点の有無、音読みか訓読みかなどがある。

### [2] 学習者の漢字学習意識調査アンケート

- ①漢字の自学自習は可能か、不可能か。その理由。
- ②a. 母国語で読むのが好きか。 b. 母国語で書くのが好きか。  
c. 母国語で読むのが速いか。 d. 母国語で書くのが速いか。
- ③a. 日本語で読むのが好きか。 b. 日本語で書くのが好きか。  
c. 日本語で読むのが速いか。 d. 日本語で書くのが速いか。
- ④例文（5文）中の漢字について、その読み、書き、意味、用法のどれがなぜ難しいか。

アンケート調査の①で、自学自習は可能か否かを問い、その回答の差異がその他の回答にどのような影響があるかを調べた。

- ②と③については、学習者が現在学習している日本語の読みと書きに対して、どのような印象を持っているか、その日本語に対する印象は、母国語に対する印象とどのような差があるのかということ、具体的には「好きか」「速いか」とたずねることによって探った。その印象によって、母国語に共通するものなのか、それとも母国語と対照的なものなのか、また読みと書きではどちらにより多く不安を感じているかというような情意的な部分の自己判定が表現されると考えたからである。
- ②と③の調査内容は表-2のとおりである。

表-2 アンケートの項目②と③の調査内容

		情意面	技能面
母 国 語	読み	② a	② c
	書き	② b	② d
日 本 語	読み	③ a	③ c
	書き	③ b	③ d

具体的な方法としては、まず項目②で、母国語について、a. b. で情意面における差が、c. d. で技能面における差があると自己判定しているかどうかを検討した。次に項目③でも同じように、日本語での情意面の差と技能面の差を調べ、最後に項目②の差と③の差を比べ、その差が日本語特有のものであるのかを調べた。

[1] は、学習者の技能的事実を明らかにするために、一方 [2] は、テストだけでは得られない事実（漢字に対する興味、印象、自己の知識に関するモニター能力）について明らかにするために実施し、両者を相互比較することにより、学習者の特性をより明らかにするのが目的である。

アンケートは、よく知っている言語で書いてもらうため英語版、日本語版の2種を用意した。

### 3. 調査の結果と分析

#### 3. 1 漢字は自習できると思うか

まず被調査者に、漢字は「自習できる」と思っているか、「自習できない」と思っているかについてを聞いてみた。答えは、「はい」か「いいえ」に丸をつけてもらい、またそう考える理由も書いてもらった。

全体としては、4対1に近い割合（45対11）で「はい」と答えた者が多かった。（図-1参照）

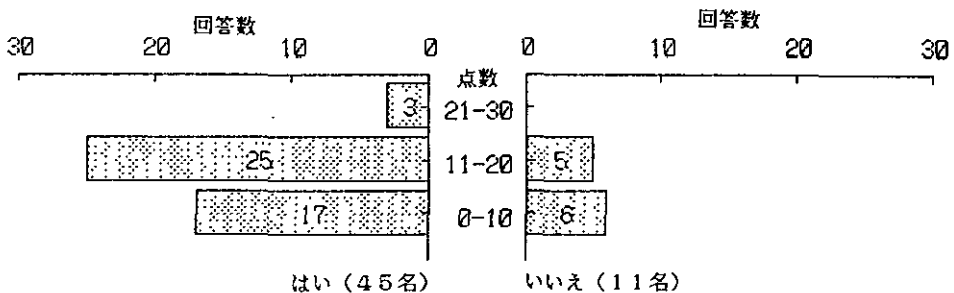


図-1 「自習できるか」という質問の解答分布 国際基督教大学日本語科 (56名)

これらの被調査者は、すでに母国である程度日本語を学習してきており、また国際基督教大学日

本語科でも3カ月以上学習しているので、漢字はどんなもので、クラスではどのようなことが求められているかは知っている。また国際基督教大学日本語科の方針として、担任の先生の裁量に任されているとはいえ、レベルによって習得漢字数が一応定められており、初級では読み書きを等しく、中級ではやや読みに比重をおいて、上級では特に漢字のクラスを設けなくて、指導が行われていることが多い。一般にクラスで足りないところは自習で補うことが求められている環境にあると言える。また上級に進級した者は、専門の授業が受けられるようになっており、そうなっただけです漢字を短期間に習得しないと、専門が分からないという状態に陥るだろうことが予想される。そのような雰囲気の中では、非漢字圏学習者だから、まだ初級だから、漢字は「自習ができない」と答えるのは難しく、その意味で「自習ができない」と答えた11名の存在は興味深い。

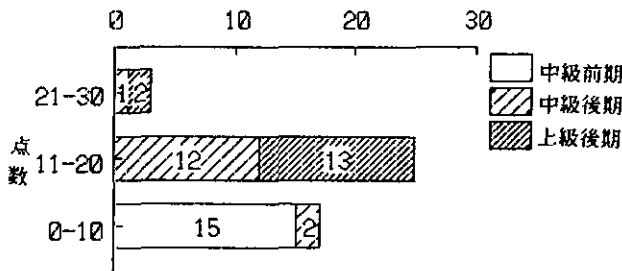


図-2 「はい」と回答した学習者、45名のクラス分布

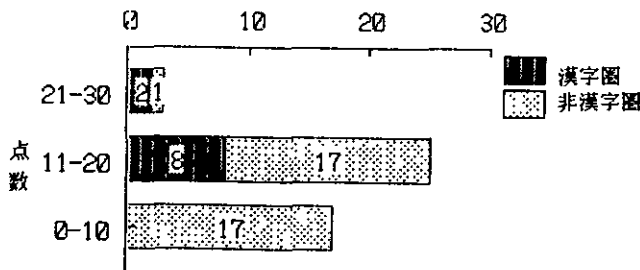


図-3 「はい」と回答した学習者、45名の漢字圏、非漢字圏の分布

この回答には、この11名を他の45名と分けるカテゴリーによる差、例えば漢字圏か非漢字圏かとか、成績上位か下位かは、見られなかった。(図-2、図-3、図-4、図-5 参照)

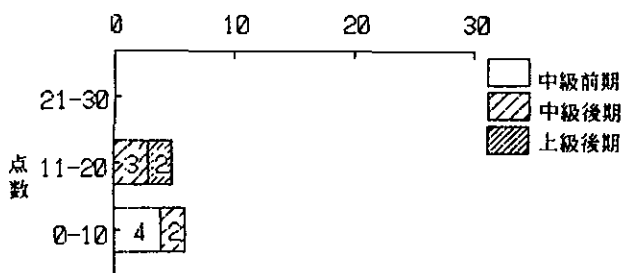


図-4 「いいえ」と回答した学習者、11名のクラス分布

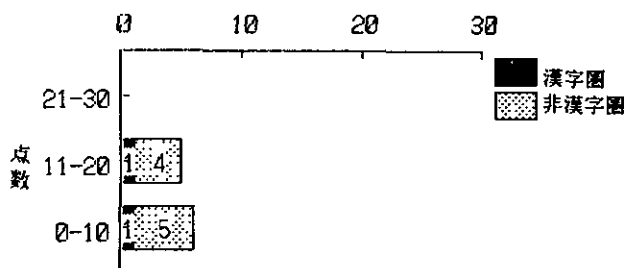


図-5 「いいえ」と回答した学習者、11名の漢字圏、非漢字圏の分布

国際基督教大学日本語科の学習者の回答（図-1）を図-6の筑波大学留学生センターの60名と比較すると、前者の回答が後者の回答ときわめて対照的であることが分かる。

筑波大学留学生センターの学習者の漢字圏と非漢字圏の別は、中国・台湾が28名、韓国が8名、アジア（マレーシア、インドネシア等）が14名、その他（ヨーロッパ、南北アメリカ等）が9名となっており、国際基督教大学日本語科の56名の内訳と比べると、より厳密な意味での漢字圏学習者が多い。また漢字力テストの成績についても、21点以上が13名、11点以上20点以下が39名、10点以下が6名となっており、国際基督教大学日本語科の学習者に比べて高い。しかし自習できるかという問いに対しては、「はい」と回答した者が27名で、「いいえ」と回答した者の31名を下回る。

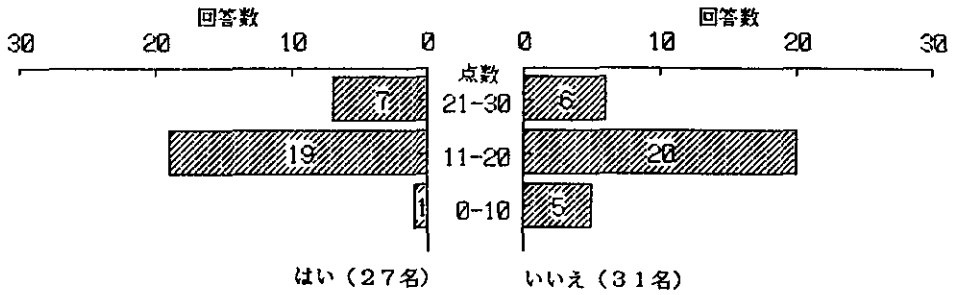


図-6 「自習できるか」という質問の回答分布 筑波大学留学生センター (60名)

普通日本語の教育現場では、「漢字圏学習者は、なんとか自力でできるようになるが、非漢字圏学習者はなかなか自力ではできるようにはならず、細かい指導が必要だ」というのが、常識になっているように思われる。そしてその常識は、長年学習者を見てきた教師の体験から得られたものであるから、上記のようにアンケートで、非漢字圏学習者が多い機関では自習できると答えた者が多く、非漢字圏学習者が多い機関では自習できると答えた者が半数以下であるという結果が出たからといって、今までの教師の常識は即誤りであるとは断定できない。

むしろこの回答に内在している学習者の問題意識は、漢字圏学習者だから非漢字圏学習者だからとか、成績上位だから成績下位だからというのでは測れないものである。それよりも、例えば漢字圏学習者は困難な音の問題は自習が難しいと考えており、非漢字圏学習者は困難な字形の再生は自習でできるようになると考えているというように、それぞれが冷静に自己判定している可能性が十分あるし、またそれぞれの機関のコースデザインの違いとか、専門へ至るまでの距離の違いといった環境的なものも、この回答に影響しているのではないかと思われる。

### 3. 2 「読み」「書き」に対する自己評価

ここで言う「読み」「書き」とは、単に漢字の読み書きにとどまらず、ある長さの文を読んだり書いたりすることである。具体的な質問は、母国語での「読み」と「書き」、日本語での「読み」と「書き」が「好きか、嫌いか」という4問と「速いか、遅いか」という4問で、回答を5段階評価で答えてもらった。

これらの質問に対する答えは、教師が行ったテストのような客観的評価とは別に、学習者自身が「読み」「書き」に対して何が易しく、何が難しいと考えているかを探り、一つ一つの漢字を覚える作業の先にある読解や作文に対してのイメージが肯定的なものか否定的なものか、母国語と日本語では違うのか、読みと書きでは違うのか、好き嫌いの度合と速い遅いの度合についてはどのような差をつけて考えているのかを調べ、それが漢字学習に対する自己評価にどんな影響を与えているかをみた。

### 3. 3 「読み」と「書き」の好き嫌いについて

図-7を見ると、母国語の「読み」に対して80%近く（44名）が「非常に好き」と回答し、極端に左上がりの曲線をなしている。それに比べて母国語の「書き」では、左上がりではあるが、傾斜がよほど緩やかになっている。母国語の「読み」と「書き」を比較すると、「読み」の方が、好きの度合いがかなり高いことが分かる。

しかし日本語の方は、「読み」も「書き」も母国語の「読み」や「書き」とは全く異なり、まん中で山をなしている。また日本語の「読み」と「書き」では、「書き」の方がやや右に位置がずれており、嫌いの度合いが「読み」より強いことを示している。日本語については、母国語ほど積極的に好きであるとは言えず、さりとて嫌いとも言えず、迷った状態にいることが分かる。

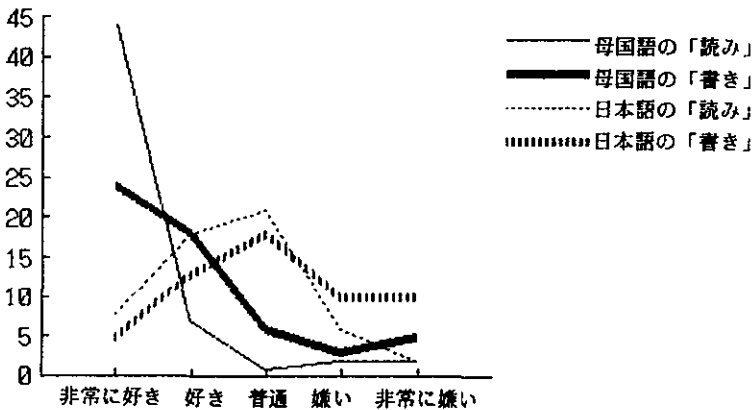


図-7 「好きか・嫌いか」の回答 国際基督教大学日本語科

この図を、筑波大学留学生センターの結果（図-8）と比べると、かなり対照的である。筑波大学留学生センターの学習者は、母国語の「読み」と「書き」それに日本語の「読み」に関して、程度の差こそあれ国際基督教大学日本語科の学習者が母国語の「読み」に対してもったのと同じような印象をもっている。日本語の「書き」についても、やや普通（16名）と答えた度合いが高いものの他の3本の傾斜と大きく異なるわけではない。



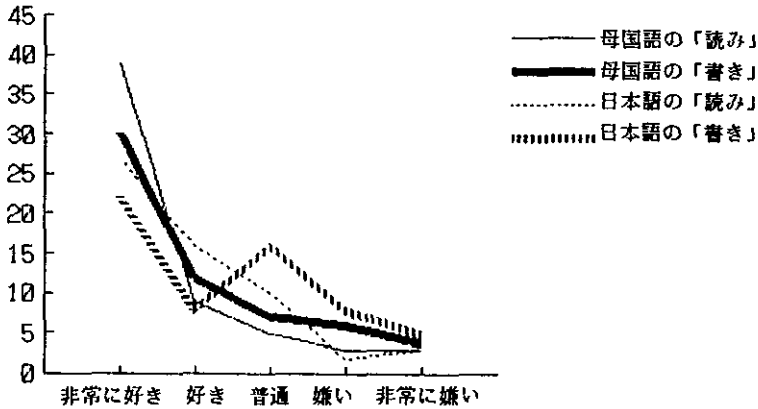


図-8 「好きか・嫌いか」の回答 筑波大学留学生センター

この2つの機関の違いは、日本語の「読み」が好きという印象をもっているか、嫌いという印象をもっているかという差であるように思える。そしてこの回答の差は、漢字圏学習者の多い機関と非漢字圏学習者の多い機関の差と言えるのではないだろうか。

### 3. 4 「読み」と「書き」の速い遅いについて

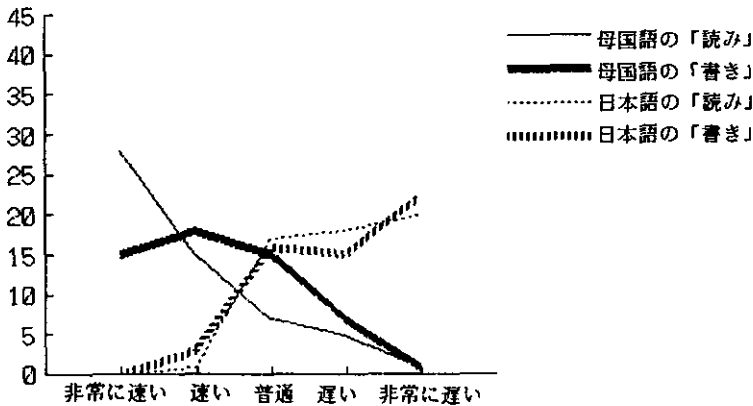


図-9 「速いか・遅いか」の回答 国際基督教大学日本語科

同じように、母国語の「読み」と「書き」、日本語の「読み」と「書き」では、どれが速くどれが遅いと感じているかを図にすると、上の図-9のようになる。母国語の「読み」と「書き」は、依然として左上がりではあるが、好き嫌い（図-7参照）に比べると、傾斜は一段と緩やかになっている。また「書き」の曲線が一番左の非常に速い（15名）ではなく2番目の速い（18名）を頂点

としたなだらかな山型をなしている。母国語の「読み」と「書き」とは対照的に日本語の「読み」と「書き」は、はっきり右上がりの傾斜を描いており、学習者は日本語は「読み」も「書き」も同じ程度遅いという印象を強くもっていることが分かる。

また国際基督教大学日本語科の学習者の回答を、筑波大学留学生センターの学習者の回答（図-10参照）と比べると、好き嫌いのときほどの差はない。ただ国際基督教大学日本語科の学習者のイメージがより極端な形で出ていると言える。すなわち母国語の「読み」と「書き」は極端に速く、日本語の「読み」と「書き」は極端に遅いというイメージをもっていることを示している。

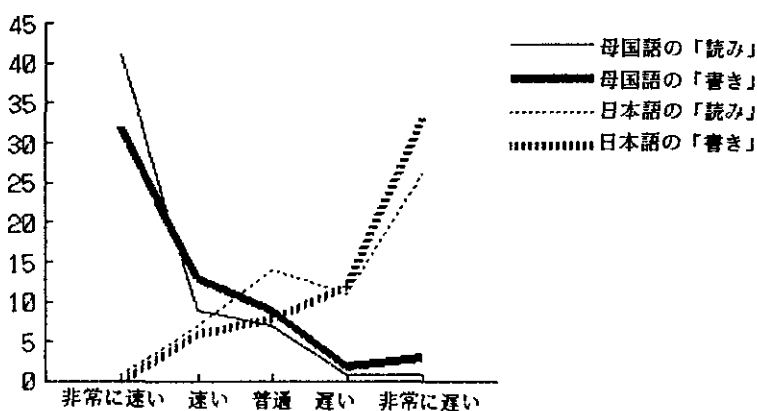


図-10 「速いか・遅いか」の回答 筑波大学留学生センター

これら2つの機関の回答の差が意味するところは、「自習ができない」と回答した筑波大学留学生センターの学習者は、好き嫌いでは日本語の「読み」にも「書き」にもかなり好意的な印象をもっているが、速い遅いの技能面ではかなり母国語との差を認めている。また「自習ができる」と回答した国際基督教大学日本語科の学習者は、好き嫌いの印象では日本語の「読み」と「書き」に決して否定的ではないがやや迷った印象を、速い遅いの技能的な面ではよりはっきりした母国語との差を表している。

ここでもっとも興味深いのは、国際基督教大学日本語科の学習者が、日本語の「読み」と「書き」の速度で遅い（「読み」18名、「書き」15名）非常に遅い（「読み」20名、「書き」22名）と回答していることである。「読み」で38名、「書き」で37名がその遅さを認めている。しかるに同じ学習者が「漢字は自習できる」と回答している事実は、技能的には劣っていても自習できるんだという自負心の現れと見ることはできないだろうか。

#### 4. 終わりに

漢字というような文字を学習したことがない非漢字圏学習者にとって、母国語と異なる文法を学

習しながら、同時に何百という漢字を覚える漢字学習の困難さは、日本語教師にも予測のつかないところがある。

それ故教師としては、この予測のつかない困難さに圧倒され、懇切丁寧な説明を試みたり、単調な読み書き練習を繰り返したりしがちである。また覚え慣れないため苦心している学習者に、できるようになることを期待しないというような態度をとったり、逆に安易な慰めの言葉をかけつづけたりもする。

しかし、今回アンケート調査に協力してくれた非漢字圏学習者は、自身の学習状況がどうであれ、他の学習と同じように漢字も自分で勉強できるものだという認識を持っている。具体的には日本語の「読み」と「書き」に楽観的な印象をもっているとは言い難い状況にあることと、自分で漢字を学習できるかどうかということは、別だと考えていることが分かった。

これは、非漢字圏学習者だからということもあろうが、その他にも国際基督教大学日本語科がづくりだしている雰囲気とか、学習者自身の学習スタイルとかも、この回答に影響していると思われる。

このような自負心をもっている学習者には、この自負心を教師が尊重し、学習者の期待にそった漢字学習の環境作りを心がけることが、学習者をして「学習項目に対してどう取り組むかの最高の判断者」<sup>2)</sup>にする最適なあり方であろう。

## 注

- 1) 清水百合(1993)「漢字学習のあり方に関する学習者の問題意識調査(1)」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第9号
- 2) Joan Rubin は、「一度訓練された学習者は、学習項目に対してどう取り組むかの最高の判断者となる」という仮説をたてている。参考文献1

## 参考文献

1. James, Carl and Garrett, Peter (1991) *Language Awareness in the Classroom*. Longman.
2. Legutke, Michael and Thomas, Howard (1991) *Process and Experience in the Language Classroom*. Longman.
3. Wenden, Anita (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Prentice-Hall International.
4. Wenden, Anita and Rubin, Joan (1987) *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice-Hall International.
5. 清水百合・加納千恵子(1992)「CAIを利用した漢字学習—授業における漢字学習と自学自習のメカニズム—」『日本語教育』78号
6. 清水百合(1992)「初級漢字クラスの問題点—漢字圏学習者を中心に—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号

7. 清水百合 (1993) 「漢字学習のあり方に関する学習者の問題意識調査 (1)」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第9号